秋の夕暮れ

K_Sayuto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
秋の夕暮れ

【Ｎコード】
Ｎ２０８８Ｚ

【作者名】
Ｋ＿Ｓａｙｕｔｏ

【あらすじ】
ある秋の日、日本の人口は男子が１人減って、女子が１人増えたと思う。
高校で野球部に入っていた水木　秋次はある日起きると女の体になっていた？
よくある異世界物でもなくよくある転成物でもなく、よくあるなっちゃったパターン。神はむかんけー。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

更新速度を超低速に変更します。

まえがき

俺は水木　秋次、只今人生最大のいや、人類最大の危機に立っております。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

昨日は部活の練習の後に普通に親友で幼馴染の静流と一緒に帰って、家についたら風呂入って、リ◯カーン見ながら飯食って、予習なんてめんどくせーと睡眠に入ったわけだ。

で、それがどうやったら今の状況につながるのかと考えている。繋がるどころか接点すらちげぇ。そもそも次元がちげぇよ。

で、今更だけど今の状況はというと朝起きて寝癖があるか確認しようと鏡を見たらそこに写っていたのはとんでもないほどの美少女なわけで。勿論オレッ娘って訳じゃない、いや他人から見たらそれ以外に何にも見えないか。

言い換えよう、俺は男だ。少なくとも昨日まではそうだったはずなんだよ。

第一話　俺が女に！？（前書き）

水木（みずき）　秋次（しゅうじ）

ある日起きると女の体になっていた主人公。女体化後はストレートな長髪で黒髪、目はパッチリとしていて小顔で肌は白く、胸が小さいこと以外スタイル抜群で身長が低い美少女

水木（水木）　和枝（かずえ）

秋次の母親でスタイルは良くとしの割に結構若く見られている。

田村（たむら）　静流（しずる）

秋次の親友で家族よりも信頼できる存在。秋次に女になってしまった事を家族よりも先に打ち明けられた。

第一話　俺が女に！？

「なんだよこりゃ」

鏡を見て放心する。少し経って俺はある物を確認しようと思った。そう、男の財宝である伝説の如意棒と黄金の宝玉を。ズボンの中に手を入れるとそこには何もなく妙にスカスカしていた。

そのうちそういやぁさっきの声も妙に高かった様な・・・・。

「あー、あー」

と高い声が出る。やべぇ、この顔とか声とかまじかわええ。俺はあえて視界のしたの方の本来胸板がある位置にある小さな膨らみは無視しておく事にした。だって触ってみて感じちゃったりとかしたらヤバそうだったから。

あーどうしようかなこれから。などと考えていると、秋次起きなさーいとオカンの声がしたので俺は

「今準備ちゅー」

と危うく言ってしまいそうになり慌てて口を閉じたが危機は去らなかった。何も返事がない事を不審に思ったのかオカンが階段を登って来ている。

ヤバイ、どうしよう。そうだっ、鍵をかけよう。

ガチャ

と鍵がかかる音がして安心する。

「秋次ー、なんで鍵なんて閉めてるのー？開けなさーい」

とオカンがドアをノックしていう。俺は

「風邪引いてるから今日は休む」

と言ってしまいそうになるが止める。俺は机の上にある紙に”風邪引いたから今日は休む、喉がやべぇほど辛いからうつらないように俺を隔離する”と綺麗とは言えない自で書きそれをドアの下の隙間から通す。

「あー、風邪そんなに酷いなら病院行きなさい」

病院だって、冗談じゃないそもそも今の俺じゃ保険証とか使えねぇだろ？

俺は”行くのも辛いから”と書いて紙を送る。

「そう、それじゃ今日は母さんもお姉ちゃんもいないからちゃんとなんか食べたりしなさいよ」

とオカンが去って行ったので一息付く。って、今ので打ち明けにくくなった気がするのは俺だけだろうか？でもどうすりゃいいんだ？女の体の事なんかなーんもわかんねぇし。ま、考えてもしゃーないし寝るか。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

今日は秋次休みか、まっプリントとか持ってってやるついでにお見舞いでもしてやろーかなぁと思ってみるけどいざそうしようと思うとめんどくせぇ。

ピロロロ、

ん、メールか。っと秋次からだ。えっと内容は”今日の放課後、静流空いてるか？”だ。何も予定とか・・・ないよな、よし。俺は”大丈夫”と送ると”じゃぁ今日来てくれ”と届いた。

今日は６時間授業だったが秘技、全教科睡眠術により体感時間的には２～３時間で終わった気がした。

放課後、俺は約束通り秋次の家へ来た。インターホンを鳴らすと誰もこなかったがメールで”開いてるからはいって”と言われたので俺は玄関に入り秋次の部屋の前まで来た。

「しゅーじー、きったぞー」

と俺がそう呼びかけると下から紙が来たので読んでみると”話がある、絶対信じてくれるか？”と書いてあったので。

「なんの事だかわかんねぇけど俺は信じるぞ」

と言うとガチャと鍵の開く音がしてゆっくりと顔が覗いてくる。しかしその顔は秋次の物ではなく女の子の顔だった。

「あれ、秋次・・・・の彼女？」

秋次には彼女はいなかったと思うが・・・・、まさかこの事だったのか話って？と俺が思ったがその話はそれと全く違った物だった。

「ち、違う・・・俺が、秋次・・・だよ」

ナンダッテ？コノオンナノコガシュウジダッテ？

「あぁ、同名か。でこの家の息子の秋次は？」

俺がそういうと秋次と名乗った女の子は少し俯いてから顔を上げ。

「だから、俺がこの家の息子の秋次。お前の親友の秋次だよ」

は？何を言ってるんだこいつは、そもそも息子ってのは男だろこいつはどうみても女じゃないか。

「おいお前、冗談もいい加減にしとけ」

と俺が声のトーンを低くし少しキレ気味な喋り方で言うと。そのいかれた女の子は一瞬ビクッと身体を強張らせる。

「だ、だから、俺がしゅ」

「いい加減にしろっつってんだよ、おい秋次何処だよ悪ふざけなんかしてないで出て来いよ」

俺がさっきの喋り方のまま壁を叩いて言うと女の子はさっきよりも怯えた表情になるがすぐにもとの表情に戻し。

「好きな物は麺類、嫌いな物は柑橘類、誕生日は9月1日、A型、両親は共に自営業」

と顔すら合わせた事のない女の子が言ったのでびっくりしたがどうせ秋次が前もって言うように指示していたのだろう。

「なんでも良いから聞いてみてよ秋次なら絶対にわかるような事、全部答えて見せるよ」

女の子はさっきの表情のままそう言ったので俺は色々と聞いて見る事にした。

「秋次の初恋は？」

「明美さん」

「俺と秋次が出会ったのはいつ？」

「小学2年生のとき遠足の班決めで余ってたお前を俺が誘った時」

「俺の特徴は？」

「高所恐怖症、めんどくさがりや、物忘れが激しい、元不良、頭は悪い、さらに」

ってこいつ本当に全部当ててやがる、本当に秋次なのだろうか？・・・ってなんか俺すごい侮辱されてる気がする。

「あー、もうわかった」

「じゃぁ信じてくれんのか？」

「信じない方が無理あるって」

ここまで言われたら信じる他ない。でもなんで女の子の姿なんだ？

「実は・・・今日朝起きてみたら女になってて、ほら胸とか膨らんでるだろ」

そう言って女の子、否、秋次は俺の右手を胸の上に乗せた。俺は思いのほか胸が柔らかくて気持ちよく手をそのままにしておくと秋次の顔が真っ赤になってた。

「そろそろ、離してくれよ」

「あっ、わりぃ」

俺は慌てて手を離した。

「それで、お前の両親は知ってるんだよ・・・な？」

一瞬ピクッと反応した、それだけ十分わかった。両親はまだ知らない。何故わかったかって？だてに幼馴染やってねぇよ。

「お前ならもうわかったよな、それで、お前から俺のオカンとかに言ってくれないか？」

どーせそう来ると思ったさ、まぁ親友が困ってるのを見過ごせないし。

「わぁーったよ、その代わり今度奢れよ」

「ありがとな」

「っへ、今更感謝すんなよ気持ち悪・・・・くもねぇな、今のお前なかなか可愛いぜ。ぜってぇーモテるぞ」

「悪ふざけはもう寄せよ。にしても、改めて思ったけど・・・・お前背たけぇな」

俺が高いんじゃなくお前が小さいんだそう思ったけどまぁ実際俺も高い方ではあるし秋次は女になって2～3回りくらい小さくなったと思う。と俺が考えていると。

「ただいまぁー」

秋次の母親が帰って来た。さぁて、ミッションスタート。

第二話　とりま、ミッションコンプリート？

「静流、頼んだぞ」

俺がそう言うと静流は任せろと言って下に降りて行く。俺もオカンに見つからないように降りる。

「おばさん、お邪魔しています」

「あら、静流君じゃない。秋次のお見舞い？」

「まぁ、そんなとこです」

「そういつもうちの子がお世話になってるわねぇ」

「いえいえ、それより今から重要なお話があります。おい、こいよ」

多分俺を呼んだのだろう。静流の横に行く。

「この子は？」

オカンが聞く。

「おばさん驚かないで聞いてください。この子は秋次です。今日朝起きたらこうなってたみたいでさっき秋次にしかわからない様な事を聞いたら全部答えたので」

「秋次？本当に秋次なの？」

「あぁ、オカン。俺だよ秋次だよ」

「まぁ、なんてこと。こんな・・・・・・可愛くなっちゃって」

へ？

直後俺はオカンに抱きしめられた。あれ？オカンの胸がめっちゃあたってるけど興奮しない、ってか親に興奮するわけないか。

「オカン、疑わないの？」

「静流君だって言ってるし、私は信じるわ、お姉ちゃんやお父さんには私から言っておくわ。これからの事は全部任せなさい」

あれ？涙が出てくる。何時の間にか俺は声をあげて泣いていた。

「お、オカン。ありがとぅ」

「あ、秋次。今日からオカンじゃなくてお母さんって呼んで頂戴。それがお礼の代わりよ」

今まで一度もお母さんなんて言ったことはないから少し恥ずかしいがこのさいしょーがない。

「わかったよ、お母さん」

「うん、秋次はひとまず部屋にいなさい。あ、静流君も秋次と一緒にいてあげてね。あ、くれぐれも間違えだけは犯さないようにね」

まってお母さんなぜ最後のほう笑ってたし。なんかこえぇよ。

「はい、できる限り間違いは犯さないように頑張ってみます」

っておい静流完全拒否しろよ。

「さぁて、上に行こうか」

静流がそう言って俺の腕をつかむ。こえぇよ、前の俺だったら簡単に振りほどけただろうけど今の俺じゃ筋力とか異常なほど落ちてるから振りほどく事も出来ない。

恐喝されるときってこんな感じなのかなぁ？

俺は静流に連れて行かれる形で自分の部屋に戻ってきた。

「それにしてもお前本当に女になったんだなぁ、力とか全然なくなってるだろ」

「え、なんでわかんだよ」

「だってお前さっき本気で俺の手を振りほどこうとしてただろ」

それは本当のことだった、本気でふりほどこうとしたがビクともしなかった。大体今まで静流にどんな事をされても恐くなかったのに（とあることにより全治2週間のけがを負わさせられた過去あり）さっきは物凄く怖く感じた。もしかしたら物理的な事以外でもなにか変わっているかもしれない.

「お前これからどうするんだ学校とか行けんのか？」

たしかにそれは大きな問題だが今はそれ以上のもんだがいある、今の俺に戸籍はない、つまりはたから見れば女になったと騒いでいる謎の痛い美少女以外の何者でもない。そう思っていると、急に扉が開きお母さんが入ってきた。

「秋次やったわ、お父さんがうまくやってくれるって。そのための精密検査とかやるから今すぐ来て欲しいって、準備しなさい」

「準備ったってどうすりゃいいんだよ」

「着替えに決まってるでしょ」

あー、着替えですかそうですか。って着替え？まてまて、俺は健全な男であり健全な男がこんな可愛い美少女を襲わないわけがない、ってよく考えたらこの美少女って俺じゃん、流石に自分で自分を襲う事は出来ねぇよ。でも待て、着替えたら見えてしまうんじゃないか？例の膨らみが。駄目だそんなものを見て平常でいられる自信がない。

「どーした秋次、顔真っ赤だぞ？」

ヤバい、いろいろと妄想してたら顔がめっちゃ熱い。てか、男のときにはこんなに熱くなんなかったぞ。

「う、うるせぇ。ってか静流はとっとと出ろ」

「そうねぇ、流石にそれはまずいわね」

とお母さんが静流を部屋の外に出しこっちを見る。

「さぁ、着替えなさい」

は？

「いや、お母さんが着せてくれるんじゃないの？俺目閉じてるから」

「何いってんのよ、これからその体で何万回も着替えることになるんだから早めに慣れときなさい。それに」

それにってなんか怖い予感が・・・・・

「こんな美少女が恥ずかしがりながら着替える姿って可愛いじゃない」

こんの、あ・く・ま。

第三話　身近な落とし穴（前書き）

水木（みずき）　柚木（ゆずき）

秋次の父親。職業は？と聞かれれば。風の吹くまま気の向くままと答え。普段は何やってるんだ？と聞かれれば。とある企業の社長と答え。今までどこ行ってたんだ？と聞かれればボランティアとかと答える。相当一般とずれている謎の多い人

第三話　身近な落とし穴

結局俺は、女物の服などを持ってるわけではないので（持っていたら変態だってｗｗｗ）ジーパンにパーカーというラフな格好にしたわけだ。しかし・・・・・、俺が普段着ている服は全部ブカブカだったので俺が小学生の時に着ていた服がぴったりだったので助かった。お母さんがとっておいてよかったと思う。

「それじゃ静流君、お留守番頼めるかしらねぇ」

「えぇ、大丈夫です。秋次、まぁがんばってこい」

こいつ顔では真剣な振りしてるが内心では面白がってるし。ほら、口を良く見てみるとひくひくしてるじゃねぇか。帰ったらいろいろといじってやる。

いきなりですが、主人公はあまりの恥ずかしさによりタヒってこの小説は終了いたしました。というのも、精密検査でいろいろと図るわけだ、検査する人が女性だったのは良かったんだ、多分・・・・・。そこで聴診器あてられたり、人間ドッグやられたり、挙句の果てにはスリーサイズを測られたときに測る人の手が俺の胸に当たって声をあげてしまった。肌の感覚がすごい敏感になってた・・・・・。現時点で確認できた変化はまず体が女になってしまった事だがそれに連動して肌の感覚が敏感になってた、まぁ後は身長とか髪とか筋力とか。精神面では、めっちゃ怖がりになってた事かな、もしかしたら涙もろくなっているかもなそれは結構つらいな。これから先こんなんでやってけるのだろうか？まぁ、検査の結果はあと数分で出るらしいのでそこで健康であることを願う限りだ。俺が座って待

ってると一人の男が目の前に現れた。

「やぁ秋次、気分はどうだ？」

俺が顔をあげてみるとそこにはよく知っている人の顔があった。

「オトン・・・・、気分は、最悪かな」

「そうだ、俺の事もお父さんって呼んでくれないか、それにほら」

オトン、いやお父さんが手を差し出しその手には何かがあった。
俺はそれを見ると改名用の紙だった。

「これは？」

「いくらなんでも女で秋次は変だろ、だからいっそ名前も変えてしまおうと母さんと話し合ったんだ」

いつの間に話し合ったんだよ、それにしても結構親って子供の事を考えているんだな。深くそう思うよ。

「それで名前の事なんだが、あまり変えるのもお前がなれるのが大変だろ。だから、お前の字からとってあきだ、漢字はそのまま秋でどうだ？」

秋か、読み方だけなら似ても似つかない名前だけどまぁそこはやっぱ慣れろってことか。漢字を間違う事はないしそれでいいな。

「それでいいよ」

「よし秋、受け取れ」

お父さんがそう言ってポケットから何かを取り出した。それは身分証明書でもうすでに水木　秋という名前が書かれていた。お父さんって本当はマジシャンだったのか？

「いやそんなに驚くな、もうすでにつくっておいたんだよ。お前がいやだって言ったら再発行しようと思ってただけだ。そうそう、検査結果だがいたって健康」

「本当か、よかったぁ」

「そう早まるな、いたって健康じゃなかった」

え？今何て？

「お前は重度の日光過敏症でな。まぁ今の時間帯はもう真っ暗だから何もなかったと思うのだが昼間は日光に当たってはいけないんだ」

「それって不可能に近くない？」

「日傘や、日焼け止めなどを使えばいいんだがそれでも日の光にあたり過ぎるといろいろと大変なことになるから気をつけろ」

それはそれは、相当つらい。俺これから生きていけるか自信無くなった。

「で、お父さんもしかして・・・・戸籍も変えられた？」

「はっはっは、心配するな。しっかりと水木　秋　性別女に変えたぞ」

どうやら戸籍とかの心配は必要なくなったようだな、いったいどんな手段を使ったのやら。

「そうだ、母さんはこれから仕事へ「キャバクラか？」

「違う、いたって健全なコンビニのパートだ。それと、静流君が家で留守番してくれてるんだって？お金あげるから彼と一緒にどっかでたべてきなさい。お釣りはこずかいにでもしなさい、父さんも今日は帰りが遅くなるからな」

そう言ってお父さんは財布から1万円を取り出す。普通に考えて5千円あれば十分なんじゃないかと思うがあまりは好きに出来るのであえて何も言わずにもらっておく。うっひゃ絶対7千円程度余るぞ（笑）。

「わかったアネキは？」

「そっちは聞いてないが多分今日も遅くなるんじゃないか？」

「ふぁーい」

そういって俺はあくびをしながらドアノブに手をかけようとするが。

「ぐぶっ」

どうやら身長が縮んでいたのでドアノブ（もともとここのは普通

のより高い位置にあった）が顎にあたった。

「大丈夫か、秋？顎が赤くなってるじゃないか。女の子になったんだから体を大切にしなさい」

「ふわぁ～い」

なんか、いろいろと考えていたけど結構日常面で相当大変かもなぁ・・・・・。戸籍とか大きなことを考え過ぎてそういう身近な事を全く考えていなかった。ＴＨＥ灯台もと暗し・・・だな。

第四話　危ない訪問者（前書き）

田村（たむら）　佳代（かよ）

静流の妹で俗に言う・・・・。いろいろと危険な人物でありどうやら秋次もとい秋の事が好きなもよう。

第四話　危ない訪問者

「かえったぞ～」

俺は家の扉を開けながら言うと奥から一人の男が歩いてきた。静流だ。

「よぉ、どうだった？」

「どうだったといわれてもなぁ、いろいろとあった」

俺がそういうと「何があった？」と聞かれた。出来れば聞いてほしくなかったような気がするような気がしない様な・・・・。

「なんかさ～、戸籍とか普通につくりかえてもらったし改名もしちゃったし。でも一番は・・・・・この体に持病があった」

「持病！？それでお前は大丈夫なのか？命にかかわるような事なのか？えっと、それで」

「落ちつけよ、お前の事じゃないだろ」

「俺の事じゃなくてもお前になんかあったら俺だって悲しいんだぞ」

急に静流は怒鳴り俺は一瞬ビクリとしてしまいすこし後ずさってしまった。

「わりぃ、急に怒鳴って。でもな、ちゃんと親友としてお前を心

配してんだからな。それで病気はどうなんだ？」

「うん、日光課金病？だっけか」

「日光過敏症の間違えか？」

「そー、それそれ」

静流はフムと考えた後。

「じゃぁ、今度必要なものでも買いに行くか？」

必要なものとな？

「何が必要なんだ？って顔してんな。要するに日にあたっちゃいけないんだから日傘とか日焼け止めとか帽子とか必要なんじゃないのか？」

「なるほー、さっすが静流だな」

と俺が言ったとこで――ピンポーン――とインターホンが鳴る。

「あ、静流待っとけ出てくるから」

と俺は行って玄関まで行き扉をあけると。

「すいませーん、うちの兄がお世話にな、っっっっっ！？」

そこには一人の女の子、静流の妹の佳代ちゃんがいた。

「どうして、先輩の家に女の人が・・・・・。まさかっ、先輩の彼女？」

「いや、ちがっ」

佳代ちゃんは目を虚ろにし四次元には通じていないポケットからたたたたったたたーんという効果音もなく一つの折りたたみ式ナイフを取り出しそれを広げ両手で持つ。

「先輩は私だけのもの、誰にもやらない」

佳代ちゃんはそれを俺に突きつけ飛びかかってくるが俺はそれを紙一重でよけるが動きの要領が違っていたので本当だったら普通によけられたはずがこけて倒れてしまった。いきなりながら大ピンチ、この小説はもう終わるのか？

「なんか、私の第六感が貴女を傷つけるのは先輩を傷つけるのと一緒って言ってるけど私は悪い子だから無視しちゃうね」

いや、その通りだよ。無視しないでくれ。ってマジでヤバい、死ぬ前に行っておくさっきのメタ発言すいませんしたー。

佳代ちゃんはナイフを振り上げる。終ったと俺は思ったがいつまでたっても痛みは来ない。あぁ、痛みもないまま天国へ行けたのは幸いだったな。

「やめろ佳代！」

俺はそんな声が聞こえたような気がして目をあけると佳代ちゃん

の手を押さえている静流が目に映った。

「お兄ちゃん！？まさか・・・・。そう、先輩の彼女じゃなくてお兄ちゃんの彼女だったのか。でも、お兄ちゃんも私だけのものなんだからどの道ここであなたには三途の川を渡ってもらうっ」

佳代ちゃんは静流の手を振り払い俺にナイフを振り下ろす。今度こそ終わったな、天国では俺どんな姿なんだろ。男に戻ってたらいいなぁ。と覚悟を決めるがまたもや痛みはなかった。今度こそ目を開けたら目の前に川があるんじゃないかと思う、それとも異世界に転生でもするのかな？俺はそう思い目をあけるとそこは俺がよく知っている場所、俺の家の玄関だった。

「あれ、生きてる？」

俺は顔をあげるとそこには悲しそうな顔でナイフを持っていない佳代ちゃんがいたナイフは佳代ちゃんの足元に落ちていた。

「どうして、貴女が先輩なの？」

俺は少しの間意味がわからなかった。

「どうして、女になっちゃったの？」

俺は静流が話してくれたのだと思ったがそんなすぐに信じるわけもないと思って静流のほうを見るとのびていた。多分振り払われたときに頭でも打ったのだろう。

「どうしてなの？なんで、こんなことになってるの先輩」

まさか、見破ったのか。この人は看破眼の持ち主ですか？と思っていたがさっき行っていた事を思い出す。“第六感”とか“貴女を傷つけるのは先輩を傷つけるのと一緒”と言っていた。まさか本当に第六感をもっているのか？

「本当に俺だよ、秋次だよ。でも、どうして俺だってわかったの？」

「うん、先輩の心と一緒で澄んでいて暖かくて、それに心紋が同じだったから」

「心紋？」

「心紋っていうのはね、指には指紋があるでしょ。それと同じようなものが心にもあってそれが心紋」

すごい、佳代ちゃんは人の心を読む事が出来るのか？俺はその事をすごく聞きたいと思ったがあまり他人に詮索されるのは良い気がしないと思ったので俺はやめておいた。

「ごめんなさい先輩、本気で・・・・殺そうとしてた」

「いや、もういいんだよ。それより静流は？」

俺は静流のほうを指さし聞いてみると佳代ちゃんは静流の額に手を当てるとこちらを向いて。

「大丈夫、脳内出血もしてないし軽い脳梗塞だから命に別条はないよ。起きたときにちょっとふらふらするかもしれないけど」

すごいな、第六感ではこんなこともわかるのか。

「それより、先輩大丈夫？」

「あぁ、大丈夫だよ。っと」

俺は少しフラッとして佳代ちゃんに支えられる。さっきまではいろいろあって気がつかなかったけど佳代ちゃんの目を見るときに顔を上げる必要がある。それはつまり・・・・。

「ちっちゃい先輩も可愛い」

と佳代ちゃんに抱きつかれた。佳代ちゃんももともと同学年の中では小さい方らしいが俺はそれよりも小さかった。なんか、自分はちっぽけだなと思う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2088z/

秋の夕暮れ

2011年12月11日20時51分発行